

## 【あがあ】

「こんどは、あがあ、じゃ。あがあたあ、なんじゃ」

ぼくはききました。

「まあその、【あがあ】は【あいじゃ】の親戚でして」

懐爺は、ぼつがわるそうにこたえました。

ぼくが熱射病になった、その責任をかんじているのです。

「やっばし、こけのおぼけかのう」

「【あがあ】は、苔ではなく、苔虫のおぼけです」

「こけむしたあ、なんじゃ」

「苔の虫で、苔虫です」

「そんなこたあ、わかっとる」

「すいません。苔に寄生する虫で、足を踏まれると、あがあって叫ぶのです」

「あれも、よろこんでいるのかのう」

「あれはほんとうに痛くて、わめいているんです。金ちゃんたら、本気でやっただしょう」

「そらあ、びょうきになったはらいせに、こけをいっぱい、ふんづけたからのう」

「苔踏みは、かえって苔を丈夫にします。それでも苔虫の【あがあ】にとっては、苦痛疼痛激痛です。【あがあ】の足は脆いですからねえ」

「ならば、【あがあ】は、あるけなくなるのかのう」

ぼくは心配しました。

またいじめっこになって、天罰にあうのもこりごりです。

「いえ、【あがあ】の足は千本ありますから、何十本踏まれて、何本折れたって、問題ありませんよ」

懐爺は、おそらく【あがあ】のつもりになって、憎たらしいくらい自慢げにいいました。

「それにしては、あがあ、あがあ、わめきすぎるのう」

「痛いんだからしかたありません」

「ちったあ、いたくても、もんだいなかろう」

ぼくが強くいうと、懐爺はすこしだけかんがえてから、

「たとえば、わたしたちの指は、両方の手と足あわせて、二十本もあるでしょう。ですが、わたしも金ちゃんも、そのうちのたった一本が折れたって、泣きわめきませんか」

「そらあ、そらあ」

懐爺の話は、あいかわらず説得力がある。

うなだれたぼくは、もう金輪際（こんりんざい）、苔を踏んづけるのは、やめることにしました。